



2020年3月29日 説教「いばらの冠」

マルコの福音書 15章 16~21節

受難節でありますから、受難の主を覚えながら、御言葉から学びます。

1. イエスをあざける兵士たち (16~18節)

①兵士たちは (16) **「兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の中に連れて行き、全部隊を呼び集めた。」**ユダの裏切りにより、夜にイエスは逮捕され、まずは大祭司の前に連行されました。イエスは「あなたはキリストですか」という問いに「わたしはそれです」と答えられました。それで、人々からつばをかけられたり、殴られたりしました。夜明けになると、イエスは縛られて、ローマ総督ピラトの所に引き渡されました。「あなたはユダヤ人の王ですか」という問いに対して、イエスは「そのとおりです」と答えられました。そのほかは何も言われませんでした。ピラトは慣例に従い、囚人であるイエスカバラバのどちらかを釈放するつもりでした。民衆はバラバ釈放を選びました。その後で、兵士たちはイエスを、ピラトの邸宅、つまり総督官邸の中に連れて行った上で、全部隊を集めました。おそらく、600名ぐらいであったでしょう。

②紫の衣 (17) **「そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ」**当時、王は紫の衣を着ていました。紫は高貴な色と考えられていたのです。兵士たちは、それに合わせて、キリストに紫の衣を着せました。また、当時の王たちも王冠をかぶることがありました。それになぞらえて、いばらで編んだ冠をイエスにかぶらせたのです。絵にもあるように、いばらのとげはイエスの頭皮にささり、強烈な痛みが走り出血したことでしょう。

③ユダヤ人の王さま、万歳 (18) **「それから『ユダヤ人の王さま。万歳』と呼んであいさつを始めた。」**そして、悪ふざけです。彼らは「ユダヤ人の王さま、万歳」と叫んだのです。「王さまに敬礼」などと言う者もあったでしょう。「イスラエルの王なら、自分で自分を救ったらどうだ」などと言う者もあったでしょう。

2. 十字架への道 (19~20節)

①葦の棒 (19) **「また葦の棒でイエスの頭をたたいたり、つばきをかけたり、ひざまずいて拝んだりしていた。」**彼らのさげすみは続きます。葦はガリラヤ湖周辺にも茂っていましたが、その茎は丈夫でした。葦で作られた棒は硬質だったでしょう。イエスは葦の棒でたたかれ、つばきをかけられたのです。イエスはつばきで、口がきけない人の口に言葉を与えましたが、兵士たちのつばきは侮辱を意味していました。さらに、イエスを冒とくし、ひざまずいて拝む格好をしたのです。彼らは何をしているのか、自分でわからなかったのです (ルカ 23:34)。愚かなことですが、それは私たち人間が誰も犯



しうるものであることを知らなければなりません。

②もとの着物に (20) **「彼らはイエスを嘲弄したあげく、その紫の衣を脱がせて、もとの着物をイエスに着せた。」** あざけりの限りをつくし、彼らはその紫の衣を脱がせました。紫色の衣ですから、それなりの値がつくからでしょう。イエスにはもとの着物が着せられたのです。彼らイエスを用いて遊んだ上で、少しも損はしないぞ、という根性でありました。

③十字架につけるため (20) **「それから、イエスを十字架につけるために連れ出した。」** そしていよいよ、十字架への道へと連れ出されます。イエス・キリストが十字架につけられるのは、午前 9 時であったとありますが、夜に逮捕されて、かたちばかりの審問を経て十字架へと至るのです。

3. 十字架を担いだ人 (21 節)

①シモンというクレネ人 (21) **「そこへ、アレキサンデルとルポスとの父で、シモンというクレネ人が、」** クレネというのは北アフリカのリビヤの海岸都市。古代ギリシャ人が建設した町です。この地にはユダヤ人が多く住んでいて、シモンもその一人であったようです。彼には二人の息子がいて、アレキサンデルとルポスでした。どうやら、彼らはキリスト教界では知られた熱心なクリスチャンであったようです。ローマ 12:13 には、パウロが「主にあって選ばれた人ルポスによろしく」と記していて、同一人物だと考えられます。

②いなかから (21) **「いなかから出て来て通りかかったので、」** シモンは、クレネからエルサレムに来ていたのです。彼からすれば、それは偶々通りかかり、イエス・キリストが十字架を担いでいる場面に遭遇したわけでしょう。しかし、それは主なる神のご計画のなかにあったのです。少し前、過越の食事をするために、イエスはペテロとヨハネを準備のために使わしました。その時に、水がめを運んでいる男に会うから、その人について行きなさいと言われました (ルカ 22:8~13)。その時の男も、自分では知らずに水を運んでいたのですが、役を果たしました。主に導かれていたのです。

③イエスの十字架を (21) **「彼らはイエスの十字架を、むりやりに彼に背負わせた。」** イエスはドロローサの道をゴルゴダの丘に向かって、十字架を背負って歩み出したのです。しかし、むちで打たれたり、棒で叩かれたりといった暴力を受けてきたイエスの体力は疲弊していました。十字架を担ぎながら、倒れたり起きたりしながらのたどたどしい歩行みでした。そこで、兵士たちが、近くにいる者の中からシモンを選びだして、十字架担ぎの手伝いをさせたのです。「無理やりに」とありますから、かなり強引にそうさせられたのです。でも、結果的にはこれは光栄なことでありました。

《結論》

旧約聖書において最初に王についたのは、サウルでした。サムエルを通して油注がれて任職しました。しかし、神への信頼が揺らいで、その地位を失い、その次に王になったのが、羊飼いであったダビデでした。旧約の世界においては預言者、王、祭司が国の役割を担う存在でした。実を言うと、イエス・キリストはこの三つの職務を全部、引き受けてくださった方です。救い主はこの三者が持っている役割を持っておられる方なのです。すなわち、救い主は御言葉を伝えて下さる方 (預言者)、治めてくださる方 (王)、とりなして下さる方 (祭司) として生まれてくださった主です。

イエス・キリストが誕生したときに、東方の博士達はヘロデ王に「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにいらっしゃいますか」と問うています。イエスは王と目されていたのです。そして、十字架につけられる直前において、祭司長や預言者たちとの問答には、お答えになっていないのですが、「あなたはイスラエルの王ですか」と問われた時には、「そうです」と答えられています。もちろん、この時の王というのはこの世の王ではなく、天と地を治められる王ということなのです。しかし、ヘロデ王も兵士たちもそれを理解することはできませんでした。新約聖書ではこのことを、わかりやすく表現しています。それは「王の王」(King of Kings) という表現です。(I テモテ 5:15、黙示録 19:16 など)。

今朝の聖書箇所では、兵士たちはイエスが王であることを認めたので、紫の衣を着せ、茨の冠をかぶせて、あざけりました。来週歌う讚美歌 136 番 1 節に「血しおしたたる 主のみかしら とげにさされし 主のみかしら」とあります。主イエスは肉体の傷みをお受けになったのです。それも、王の王であることを正しく理解していない

兵士たちがかぶせた、いばらの冠をあえてお受けくださったのです。

今朝の聖書箇所において、注目したいことは、主イエスが一言も言っておられないということです。沈黙しておられるのです。しかし、主は沈黙の中に何かを語っておられるのではないのでしょうか。主は何を語っておられるのでしょうか。

イザヤ書 53 章にこうあります。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた」(4~5 節)。

沈黙の主は、「この痛みはあなたのためなのだよ。あなたの代わりに私は十字架に上るのだよ」と語りかけてくださっているのだと思います。私たちはこの方を見上げて、信じることによって、救われるのです。改めて、受難の出来事を覚えながら、主の前に出ていき

ましよう。